（ｐ96～97）

SH-1と13の構造

ピンで組まれた実例

ピンで組むためにはすじかいの位置が大切です

　ピン架構とすじかいの位置

　ピンで組まれた構造では、よこからの力で建物が壊れないように、どうしてもすじかいが必要なことは前述した通りである。だからといって、ただ入れれば安心というわけにはゆかない。力の方向のところで説明したように、建物には前後左右あらゆる方向から力が加えられる。そこですじかいもこれに応じて四角い建物なら四面二方向に、均等に配置されなければならない。もし一方に偏してか、あるいは一カ所にかたまって設けると、すじかいのない部分とある部分との丈夫さがちがうので、建物はねじれをおこす危険がある。SH-1と13は、ピン構造の代表的な例で、この二種の建物はさらに長手方向の中央間近に、建物全体の曲がりを防ぐための突出させたすじかいをとっている。いずれもすじかいは引張りにはたらかせるために鉄筋が使われている。

ラーメンのくみかた

　ラーメンに忠実に

　ラーメンは別名を剛接といわれるように、丈夫でびくとも動かない構造でなければならない。こういう接合部を作ることは、コンクリートのように、柱と梁などを一体に造ってしまうことが簡単にできる材料ならば容易なのだが、木造では殆んど不可能に近かく（狂いや、めり込みがあるため）、鉄骨でもなかなか簡単ではない。右の図は一般に鉄骨鉄筋コンクリートの大ビルディングなどに使われている鉄骨造のラーメン接合部の代表的な例である。こうした構造では、この接合部の組立ては現場で行われるので、殆んどがリベットで止められている。ラーメンの接合にはボールトの使用は法律で認められていないため、少々施工中近所迷惑になってもリベットを使っている。リベットよりもっと完全な方法に溶接がある。

近頃では都心のビルで盛んに使っているが、現場で行うには特殊な技術がいる。

（p112~113）

どんな順序でつくられたか

　平らな屋根

　向いの丘と町の家並みを見下ろす高台に水平に拡がる屋根は、一見板を置いたように見える。（右上の写真）この板のように薄い屋根は、天井と一体になって、さえぎるものの役割を立派に果している。この屋根と天井を床から浮かしておくために柱や梁が必要なことは前述した。天井から屋根までの間は四層になっていて、一番上が水をさえぎるための防水モルタル、次が熱をさえぎるためのパーライトモルタル層、その下にこれらを受けるためのラスシート（角波鉄板に金網を溶接したもの）その下に天井仕上げまで熱をさえぎる目的で、石膏ボードとアルミ箔でできた四層の空気層があり、天井面は硬質繊維板で仕上げられている。下の二枚の写真はその最後の天井板を取り付けているところ。

鉄骨の組立て

屋根と天井をささえるだけとはいいながら、骨組みが狂っていると、壁や家具の取付けにまで影響するので、鉄骨の組立ては厳密な正確さを要求される。SH-30の構造は三鉸接ラーメンが使われているが、これはSH-39(66貢参照)と同じ理由で、組立てられるラーメン構造としての有利さを活用するためである。上の写真は、鉄骨の組立て中でラーメンとピンの組合わせがよくわかる。左の写真は柱の位置を正確に合わせているところで、この建物は、全部の柱や梁の高さや位置の狂いを2mm以内にするように要求していたので、柱の取付く基礎の上面もよく検査され、柱も組立て完了までの間に、何回かこうして検査された。この作業を充分やっておいたために後の仕事は非常に楽に進めることができた。

（p116~117）

和室

この部屋は京間の六帖で中央に切りゴタツがある。障子を開けると西側の石を組んだ池のある庭と、裏山の林が見える。左の床の間はヘツシヤンクロース貼り、天井はモミ金貼りで、ブロックを積んだ西側の壁だけが京壁仕上になっている。

主寝室

主寝室には書斎がある。書斎の脇の大きな硝子の外に、小さなテラスと広い植込み、さらにその向うに広いテラスと続く。これらは東側の煉瓦の壁とともに、狭い寝室にムードを生み、必要に応じて大空の下に開放感を味わえるように計画したもので、連続した床を利用して各個室の環境に変化をあたえている。

子供室

次項の写真は子供室。窓を通して芝生に囲まれたプールに続いている。